令和２年10月20日発行　通巻215号

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

神奈川県立歴史博物館だより

No.2
OCT.2020 Vol.26

特別展
「相模川流域のみほとけ」の見どころ …… 2

特別展
「かながわの正月–よい年になりますように–」を準備中！…5

THE　けんぱく　PUNCH　図書資料の修復 …… 8

千手観音菩薩立像　奈良時代～鎌倉時代　海老名市　龍峰寺（重要文化財）　提供：奈良国立博物館　撮影：森村欣司

特別展「相模川流域のみほとけ」の見どころ

神野　祐太

本特別展は、その名の通り「相模川」の流域に伝わる仏像を中心とした仏教美術に注目した展示です。県内で仏像と言えばまず鎌倉、次に箱根や大山周辺が挙がると思います。これらの地域だけではなく、相模川流域にもたくさんの仏像が伝わっているのです。現在、相模川に接する自治体は、相模原市・平塚市・茅ヶ崎市・厚木市・海老名市・座間市・寒川町・愛川町で、これらの自治体に属する寺社の仏像を多数展示します。この地域の仏像が一堂に会するのは、初めてのことだと思います。また、相模川の源流である山梨県、そして、相模川流域と深い結びつきのある藤沢市と鎌倉市の仏像もあわせて展示し、より深みと厚みを生み出します。出品資料は全部で70数件、その内仏像は約50軀で、その9割以上が秘仏や非公開で普段安置している寺社では拝することができないのです。国指定重要文化財を7件、さらに各市町の指定文化財の仏像等を17件展示します。各市町の指定文化財が多く展示できるのは、昭和の終わりから平成にかけてこの地域で行われた仏像の悉皆調査の調査結果を反映しているといえるでしょう。小稿では、その見どころをご紹介したいと思います。

【図1】聖観音菩薩立像　普門寺

相模原市緑区の平安仏2軀

相模原市緑区には、平安時代に造られた仏像が伝わります。普門寺の聖観音菩薩立像【図1、相模原市指定文化財】と顕鏡寺の阿弥陀如来坐像【図2、同】です。どちらも平安時代に平安京で流行した定朝（じょうちょう）様式の仏像で、京から運ばれてきたのではないかと想像されます。普門寺像は、像の大きさが三尺（約1m）で、両腕や天衣（てんね）、足先に後補の部分があるとはいえ、大部分は当初の造形を残しています。顕鏡寺像は、高い肉髻（にくけい）（頭頂の盛り上がった部分）や薄い衣文線に定朝様式が色濃く反映されています。印相が珍しく、通常の弥陀定印（みだじょういん）と違い、親指と人差指の間にすき間ができています。

【図2】阿弥陀如来坐像　顕鏡寺

【図3】不動明王坐像　国分寺

【図 4】阿弥陀三尊像　宝生寺

【図 5】菩薩立像 無量光寺 相模原市教育委員会提供

海老名市の国分寺不動明王像

海老名市国分寺の不動明王坐像【図 3】は、平安時代後期の奈良仏師の手になると考えられ、本特別展の中でも屈指の仏像です。国分寺像はこれまであまり知られていませんでしたが、今回寺外初公開となります。小さな像ですが、顔には品位があり、目に玉眼が嵌められていることから、リアルに見えるのではないでしょうか。この玉眼は、目を刳り抜いて裏から水晶をあてて本物の目のようにみせる技法です。奈良仏師によって平安時代後期から使用され、鎌倉時代以降に大流行しました。その玉眼が使用された初期の仏像といえるでしょう。奈良仏師は、平安時代の仏師定朝の流れを汲み奈良で活躍した仏師集団のことです。ここから有名な運慶や快慶等の慶派仏師が誕生します。国分寺像は、運慶の前の世代の仏師が造ったのです。

霊験仏の模刻像

鎌倉時代になると霊験あらたかな仏像を模刻することが流行します。この地域でも、長野善光寺の絶対秘仏銅造阿弥陀三尊像の模刻像が造られました。本特別展は、茅ヶ崎市宝生寺阿弥陀三尊像【図 4、国指定重要文化財】と相模原市南区無量光寺菩薩立像【図 5】が展示されます。宝生寺像は、当館では昭和 63 年（1988）に開催された「神奈川の金銅仏―銅・鉄の仏たち―」以来の展示となります。昭和 34 年に重要文化財に指定されていますが、伝来についてはあまりよくわかっていません。まだ、確証はありませんが、宝生寺の近在に鶴嶺八幡宮があり、その別当寺であった常光院の本尊像であったと推測しています。常光院は明治初年の廃仏毀釈で廃寺となっているので、その什宝が宝生寺に移動した可能性は十分に考えられます。もしそうであるならば、八幡神の本地仏ということにもなり、また別の一面がみえてきそうです。

もうひとつの像が伝来する無量光寺は、時宗二祖他阿真教（たあしんきょう）が開山した時衆（宗）寺院で、昨年当館で開催した「真教と時衆」で詳しくその事績を紹介しました。無量光寺像は、善光寺式阿弥陀三尊像の脇侍の一軀が残されたものとみられ、真教ゆかりの仏像ではないかとも指摘されています。宝冠（亡失）や天衣などを別に造って鋲で止める丁寧な造りで、通常胸前で手のひらを合わせるところを、左手だけ親指と人差指を付けています。

平塚市の光明寺と宝積院

平塚市金目には古刹光明寺があります。光明寺は、奈良時代開創と伝え、平安時代以降現在に至るまで信仰され、その歴史が建造物や仏像、文書資料から窺える稀有な寺院です。境内近くの南金目琉球山経塚から発見された経筒は、仁平 4 年（1154）に造られたことが銘文からわかります。鎌倉時代になると鎌倉幕府からの帰依もあり、光明寺僧が建久 3 年（1192）の後白河法皇の四十九日法要、翌年の一周忌法要に参加しています。さらに、北条政子の安産祈願も行いました。鎌倉時代後期から南北朝時代にかけては、鎌倉宝戒寺で活躍する天台僧惟賢が活動したことでも知られ

【図 6】三十三応現身像 光明寺 平塚市教育委員会提供

ます。そのような光明寺には仏像もたくさん残されており、平安時代の本尊聖観音菩薩像をはじめ、山門には中世の金剛力士像が安置されています。本特別展には、その中から三十三応現身像【図 6、平塚市指定文化財】を展示します。救う人によって、観音が 33 に姿を変えるという経典の教えをもとにしたものです。

夢窓疎石の頂相彫刻

本特別展の大きな見どころのひとつとして、臨済宗の祖師像を多く展示することが挙げられます。特に、鎌倉市瑞泉寺と山梨古長禅寺の夢窓疎石坐像は注目です。夢窓疎石は鎌倉時代末から南北朝時代にかけて、後醍醐天皇・足利尊氏・北条高時等から帰依を得た臨済宗の高僧です。どちらも国指定重要文化財で、瑞泉寺像【図 7】は近年鎌倉時代末の製作ではないかとの指摘があり、古長禅寺像【図 8】は、延文 2 年（1357）に夢窓疎石の七回忌にあわせて造られた像とわかっています。重要文化財に指定されている夢窓疎石の彫像はこの 2 軀のみというところも強調しておきましょう。また、山梨と鎌倉をつなぐ、中間地点である相模原市緑区光明寺に伝わる頂相の夢窓疎石像も後期に展示します。

【図 7】夢窓疎石坐像　瑞泉寺　鎌倉国宝館提供

駆け足で、見どころを紹介しました。他にもたくさん見どころはあります。たとえば、海老名市龍峰寺の千手観音菩薩立像の存在感は圧倒的です。相模原市緑区安養寺の摩利支天像は猪に跨る、陽炎を神格化した尊像です。その猪は中世の動物彫刻としても本格的な造りで、そのとぼけたような表情とともに、ぜひ見ていただきたいです。仏像以外にも、平塚市真土大塚山古墳から出土した三角縁四神二獣鏡（東京国立博物館所蔵）や茅ヶ崎市下寺尾廃寺跡、海老名市国分寺・国分尼寺跡等から出土した仏教関係の出土遺物も展示し、最後には戦時中の津久井郡（現、相模原市緑区）への文化財疎開の資料を紹介します。

相模川流域の仏像や仏教美術を通してこの地域の歴史と文化についてすこしでも興味をもっていただければうれしいです。

（じんの・ゆうた　学芸員）

特別展　相模川流域のみほとけ

会期：2020 年 10 月 10 日（土）～ 11 月 29 日（日）
休館日：毎週月曜日（ただし 11 月 23 日は開館）
会期中、一部の作品・資料の展示替を行います。

【図 8】夢窓疎石坐像 古長禅寺 山梨県立博物館提供

特別展「かながわの正月―よい年になりますように―」を準備中！

新井　裕美

はじめに

本展示では 12 月中旬から立春までの行事のうち、現在の神奈川県域の大正月と小正月を主に取り上げます。この期間は暦通りに繰り返される様々な年中行事の中で、最も多くの行事が行われています。本稿では特別展に関するいくつかの資料や行事を取り上げ、その見どころを紹介します。

正月に大・小がある？！

前文に大正月と小正月という言葉が登場しましたが、ここでは先に暦について話を始めましょう。7 世紀に朝鮮半島の百済を通じて中国の暦（太陰太陽暦）が導入される以前は、月の満ち欠けを基にした原始的な暦が用いられていました。この暦は満月となる 15 日を月の始まりとして、稲作農耕の開始時期に当たる 4 月 15 日を年初としてまつりをしていたと考えられています。この慣習は中国から輸入された暦の普及によって公に 1 月 1 日を年頭とすることが励行され次第に定着していきましたが、農耕に携わる者たちにはなお満月の日を重視する習慣が色濃く残り、15 日には農耕儀礼にかかるまつりが営まれ続けてきました。このような状態が続いていくなかで 1 月 1 日は正式な正月となり、同月 15 日は副次的で私的な正月として二重に祝うことが生じ、前者を大正月、後者を小正月として二つの正月が生まれたのではないかとされています。大正月と小正月という呼称は主に中部地方から東北地方で用いられています。

大正月を迎える

門松

大正月とは一般的には元旦から 7 日までの期間を指し、門松を立てる期間でもあるため松の内ともよばれています。ここで最も核となることは、大正月の時に来訪するトシガミ（年神・歳神・歳徳神）を各家でまつることで、トシガミの来訪によって新年を迎えられるとされています。トシガミを迎える準備は、屋内の煤払いをしたり神棚を整えたりすることから始まります。門松を立てることを松迎えともいい、かつては明きの方（トシガミが来訪する縁起の良い方角）から松を切り真竹を添えて左右一対に立て、その間に注連縄を張るという形が多くみられました。門松は正月を彩る単なる装飾ではありません。相模原市緑区青根では大正月の三が日にご飯を、鎌倉市十二所では雑煮を、藤沢市江の島では餅を門松に供えていることから、門松をトシガミの依代とみなしていたといってよいでしょう。

県内には門松と称していても松を用いない地域もあります。秦野市堀山下では、家の門口に榕を一対立てています【図 1】。また箱根町仙石原や宮城野では竹、樫、榊を門松としていますが、19 世紀に江戸幕府によって編纂された『新編相模国風土記稿』にも、仙石原と宮城野では松の代わりに榕を立てていたという記述があります。(1) 宮城野では氏神である諏訪神社がかつて松で目を突いて片目になったからだとも、松は箱根権現の目を突くので用いないのだとも言われています。

【図 1】　秦野市堀山下　2019 年 1 月 2 日撮影

トシガミの棚

トシガミをまつる年棚は常設の神棚に注連飾りなどの正月飾りをつけてそのまま当てる場合もありましたが、相模原市緑区佐野川では巣籠り松という臨時のトシガミの棚を作っていました【図 2】。棚の底部は楢の薪を四つ割りにして縄で編み、その上に松・樫・竹を藁縄で束ねて挿して

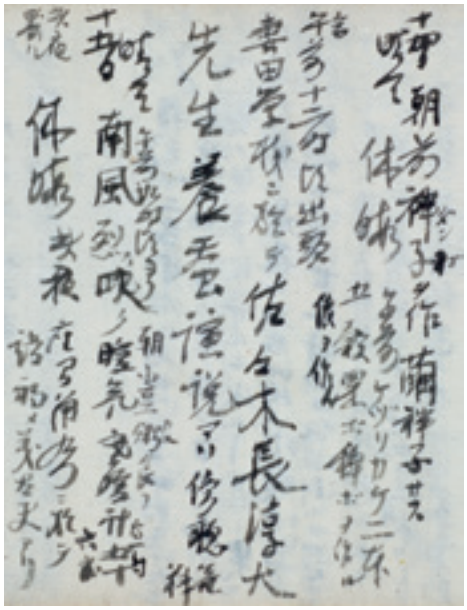
【図 2】　巣籠り松

あります。この松は縁起がよいとされる雀などの小鳥が巣をつくっていたものを予め見つけておき、暮れの26日を松切りの日として根元から切り出してきたものです。手前には呎（以前は米俵）があり、呎にはトシガミの御札が挿してあります。呎を用いた年棚は旧津久井地域から相模原市内の相模川沿いにみられる習俗です。呎は穀物などを入れる袋で、新しい年もこの呎一杯に穀物が獲れますように、という願いが込められているのです。この巣籠り松の高さは約170㎝もある大きなもので、これを座敷の天井から吊してトシガミをまつりました。

小正月を迎える

小正月とは1月15日前後から20日までの期間を指し、豊作を願う予祝、一年を占う年占、どんど焼きやサイト焼きなどとよばれる火祭り、来訪神に扮した者の訪れなどがあります。予祝とは豊作や農作業を予め模擬的に行うことで豊かな実りを期待する呪術的な儀礼です。この時期に作られる細工物をモノツクリと総称し、かつては県下では広く行われていました。ここでは明治25年（1892）1月14日と翌日の日記【図3】の記述からモノツクリを具体的にみていきましょう。これは厚木市金田の星野岩吉（慶応2年[1866]～昭和5年[1930]）が明治19年（1886）～昭和4年（1929）まで書き継いだ農業日誌で、天候、日々の農作業、年中行事などが記されています。

十四日　晴天
朝前禅子(ママ)ヲ作　繭禅子サス
　休暇　午前ケヅリカケ二本
　　五穀粟ボ稗ボヲ作ル　俵ヲ作ル　（後略）
十五日　晴天
　（前略）朝小豆粥食フ　休暇　（後略）



【図3】　星野岩吉　農業日誌　個人蔵

団子

団子、繭団子とは、養蚕の成功を願って蚕の繭に模した団子を木に挿したものです。団子を挿した木は石臼の物入れ（挽くものを入れる上臼の穴）に挿して台にしたり大黒柱に括り付けたりします。また団子はその家の主な生業に関係がある形に成形されることもあります。【図4】は秦野市今泉のあるお宅のもので、落花生、胡瓜、人参、煙草の葉、鎌、小判などを模した団子が豊富に挿してあります。星野家の繭団子も写真のように座敷を華やかに彩ったことでしょう。

【図4】繭団子　秦野市今泉　2015年1月14日撮影

ケズリカケ

ケズリカケとは、【図4】のように団子の木の左下に立て掛けてあるものがそれで、カツノ木（ウルシ科ヌルデ）の表皮を薄く削ると木の繊維がフサフサと縮れたようになります。ケズリカケは紙が普及する以前の古い御幣の形態を残しているとされ、これを家の門口、神棚や仏壇、屋内の神々に供えたり、15日のカユカキボウ（粥掻棒）として小豆粥を掻き回したりするときに使用します。星野家でも15日の朝食に小豆粥を食べた記載があります。【図4】にも、団子の木の足元に上部だけ樹皮を残し、下部は樹皮を剥いだカユカキボウが2本あります。小豆粥を作る時は、粥占といってカユカキボウの先端に割れ目を入れて粥をかき混ぜ、その割れ目に挟まった米粒の多少で一年の天候や作柄を占います。粥占の方法には竹や蘆などを粥に入れて煮込み、管の米粒の入り具合で占う方法もあります【図5】。

【図5】横浜市港北区 師岡熊野神社 2019年1月14日撮影

粟ボ稗ボ、俵

アワボウヒエボウ（粟穂稗穂）とは、カツノ木の枝を10㎝程度に切り、それをいくつかに割いた竹の先端に挿してしだれるように作ります【図6】。粟や稗の穂がたわわに実って首を垂れた様子を模したもので、かつて粟や稗が重要な食物としての位置を占めていたということを伺わせます。俵とは【図4】の石臼の上にあるもので、カツノ木を束ねて米俵を表しています。

【図6】相模原市相原　昭和時代撮影

子どもたちの活動

本県の中には今日でも小正月に子どもが主体となり、各家の厄祓や言祝ぎを行っている地域もあります。足柄上・下郡や旧大住郡ではアクマッパライ、三浦市ではチャッキラコ、小田原市では福踊りがあり、また県西部では子どもたちが道祖神の山車に乗ったり神輿を担いだりするなど、地域的特徴がみられます。

秦野市堀山下では、1月13日の夕方から夜にかけてアクマッパライが行われていました【図7】。これは「小正月の訪問者」という行事に分類されるもので、秋田県男鹿半島のなまはげもその一つです。小学校6年生の男児が大将として天狗に扮し、それに続く児童らも面を被り、着物を後ろ前にした格好で「アクマッパライ」と唱えながら集落内の家の中を祓い清めました。それが済むと御札や縁起物を渡し、家人からは賽銭を受け取りました。ここで注目される点は、児童らは仮面を被って顔を隠し、通常とは異なる着物の着方をしていることです。この行事の根底には、子どもたちは異形を纏うことによって神に扮し、その神がこの世とは異なる世界から福を授けるために来訪するという心意があるといってよいでしょう。

【図7】1993年1月13日撮影　個人蔵

おわりに―「よい年になりますように」

本展示に通底することは、新たな年を今年よりもさらによいものにしたい、という人々の切なる願いです。一年を振り返ると、それぞれの思い出が蘇ってくるところですが、今年は真っ先に頭に浮かぶことの一つに、新型コロナウイルス感染症が蔓延したことが挙げられるでしょう。サブタイトルの「よい年になりますように」には、特別展で紹介する内容だけでなく、私たちの実生活に向けても、そしてこの特別展の開催が無事に叶うようにと願いを込めてつけました。

ここでご紹介した資料や行事は、紙面の都合で今回の展示のごく一部にすぎません。県内では現在でも大正月及び小正月の諸行事が盛んに行われている地域もありますが、なかには既に廃れてしまったものもあります。本展示では今日ではみられなくなった民俗資料、近世・近現代の暦や日記、かつての行事の映像などを用いながら、行事の根底に流れる心意を読み解いていきます。また、諸行事には地域毎に特徴がみられるものもあり、郷土色豊かな様子を紹介いたします。

新しい年が豊かなものになるように願う人々の活力ある営みを感じ取っていただければ幸いです。

（あらい・ひろみ　学芸員）

註

(1)　蘆田伊人編『新編相模国風土記稿』1　雄山閣　1985年　272、274頁

参考文献

・田中宣一『年中行事の研究』桜楓社　1992年
・神奈川県企画調査部県史編集室　『神奈川県史』5　民俗　1977年

特別展　かながわの正月

―よい年になりますように―

会期：2020年12月12日（土）～
2021年1月24日（日）
休館日：毎週月曜日（ただし、1月11日は開館）
年末年始12月27日（日）～1月4日（月）
1月5日（火）は常設展はご覧いただけません。
会期中、一部の作品・資料の展示替を行います。

図書資料の修復①

旧横浜正金銀行本店の建物を引き継いだ神奈川県立歴史博物館では、業務を継承した東京銀行（現・三菱UFJ銀行）のご協力により、横浜正金銀行調査部資料の一部として約１万１千冊の図書を所蔵しています。そこには、和書・洋書ともにあらゆるジャンルの図書や、貴重な横浜正金銀行発行図書・作成資料も含まれています。ただし戦前の図書は表紙や頁がばらばらに外れていたり、皮革製表紙が著しく劣化しているものも多く…

担当職員（以下、担）：って、聞いてますか？営業部長！

パンチの守（以下、パ）：な、なんじゃなこれは!?

担：紙の劣化により頁や表紙が細かく割れている図書も沢山あるのですよ。

パ：どうするのじゃ？

担：慎重に広げながら、和紙と、ふのり代わりの水溶性セルロースエーテルを使って貼り合わせて行くのです。

パ：う～む、気が遠くなるのう。

担：欠損した頁の一部が別の図書の中でみつかり、あてはめてみたら文字がピッタリつながった！なんていう感動があったりもするのですよ。

パ：破損した図書はどのくらいあるんじゃ？

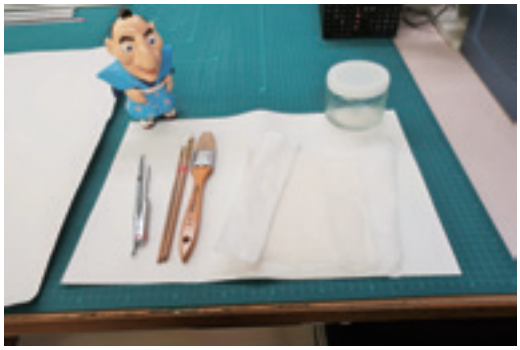
担：修復を急ぐ状態のものだけで、和書・洋書合わせて約３千冊、その内の約２千４百冊は修復及び保存ケース作製済みです。

パ：修復にはどのくらいの時間がかかるものなのじゃ？

担：糊が乾くのを待つ間に別の図書の直しというように、３～４冊を並行して修復することが多いのですが、２日ほどで仕上がるものもあれば、１０日以上かかるものもあります。

パ：和紙とふのり代わりのなんとやらと…

担：水溶性セルロースエーテルという植物性繊維粉を水で溶いて使いますが、天然由来のもので変質せず、ふのりと同じく水でなぞるときれいに剥がせるという特徴があるのです。



◀図書修復の道具

パ：ほう。ワターシも和紙については知っておるぞ。和紙は劣化しにくく強いのじゃ！

担：さすがです！和紙は強くて長い繊維でできているため、その繊維を活かして使うと、わずかな和紙でも修復部分になじんでしっかり付いてくれて、しかもきれいに剥がせるのです。

パ：うむ。資料としての図書の修復というのが、直すだけでなく、必要があれば修復前の状態に戻すということも考えられている、ということもわかったぞ。ワターシの知らない作業がまだまだあるものじゃのう。

（吉澤 智恵子 / よしざわ ちえこ・非常勤資料整理員）

発行：神奈川県立歴史博物館　http://ch.kanagawa-museum.jp/　twitter @kanagawa_museum
〒231-0006　横浜市中区南仲通 5-60　TEL　045-201-0926　FAX　045-201-7364
発行日：令和２年 10 月 20 日　印刷：株式会社 TAKT・JAPAN